

聖書：ヨハネの黙示録 5：1～7

説教題：屠られた姿で立つ子羊

日時：2021年1月31日（朝拝）

前の4章から新しい幻が始まりました。ヨハネは天に引き上げられ、天の御座の光景を見させられました。私たちはこの世に住んでいる者として、この世の王座ばかりを考えやすいものです。当時、世界の王座に着いていたのは第11代ローマ皇帝のドミティアヌスでした。しかし4章の幻が示していたことは、地上の王座にはるかに勝る王座が天にあるということです。この世界と宇宙を真に治め、コントロールする座は天にあるということです。ヨハネはそこで天使的存在が昼も夜も賛美している光景を見ました。特に前回は神の創造のみわざがほめたたえられていました。神は目的をもってこの世界を造り、その計画に従って今も世界を導いておられます。そしてその目的を必ず成し遂げられます。この光の下で私たちの地上の生活も捉え直さなければなりません。

しかし4章を見るだけでは、果たして私たちは救われるのかどうか定かではありません。この世は誰も手の施しようがないほど混乱状態に陥っているわけではなく、神が全てを治め導いているという知らせは確かに良いものです。しかし神は4章8節で「聖なる、聖なる、聖なる」方として賛美されました。その聖なるお方の前で罪ある私たちは生きることができるのか、果たして救われ得るのか。そのことへの答えを与えてくれるのが今日の5章です。

ヨハネは1節で、御座に着いておられる方の右の手に巻物があるのを見ました。この巻物とは、この後を読むと分かりますように、一言で言えばこの世界に対する神のご計画が記されたものです。「それは内側にも外側にも字が書かれていた」とあります。つまりびっしりと、たくさんの方が書かれていた。これは神の計画が詳細にまで及ぶことを暗示します。またこの巻物は7つの封印で封じられていました。封印とは、ふさわしくない人が勝手に中を開けて見ることがないようにするためのものです。開けるべき人だけが開けるようにするためのものです。重要な文書の場合に特にそうされます。その封印が7つもありました。7はこれまで見て来た通り、完全数です。ですからそれだけしっかり、完全に、厳重に封印されていた。なお私たちはここにもダニエル書とヨハネの黙示録の深い関係を見ることができます。ダ

ニエルは彼の時代の後に起こることについて様々なことを示されましたが、終わりの日に起こることの詳細については知らされませんでした。ダニエル書 12 章 8 節でダニエルは「わが主よ、この終わりはどうなるのでしょうか」と問いましたが、主は 9 節でこう言われました。「ダニエルよ、行け。このことばは終わりの時まで秘められ、封じられているからだ。」今日の箇所はこれに対応するものと考えられます。聖書が語る終わりの日はイエス様の到来と復活によって始まっていますが、その終わりの日について神はどういう御心を持っているか、その詳細が記され、封印された巻物がそこにあったのです。

ヨハネはその巻物を見た後、2 節で一人の強い御使いが「巻物を開き、封印を解くのにふさわしい者はだれか」と大声で告げているのを見ました。世界の今後の成り行きについて記されている重要なこの巻物。それを開くにふさわしい者はいない、と全世界に大きな声で語ることができる強い御使いがそう語るのをヨハネは聞きました。しかしだれ一人、それができる者はいなかったと記されています。ここで押さえておくべきことは、封印を解くとは、単にシールのようなものを剥がして中に書いてあることを明らかにするというだけでなく、そこに書いてあることを実行することも含むということです。シールを剥がすことくらい誰でもできるのではないかと思うかもしれませんが、そこに記されている神の御心を実行に移せる人、その権威を持っている人のみが封印を解くことができるのです。しかしそれができる人は一人もいませんでした。

そのため、4 節でヨハネは激しく泣きます。なぜでしょうか。それはこのままでは救いがないからです。これまでも見て来ましたように、地上の教会は迫害の中、また困難な戦いの中にありました。そんな中でも神が主権を持ち、救いの計画を持っておられることに望みを置いて従って来ました。しかしそのことが書いてある巻物を開くことのできる人がいない。つまり神の御心が示されない状態が続く。そしてそれは先に見たように、そこに記されている神の御心が展開されて行かないということでもあります。神は良い救いの計画を持っていてくださるはずなのに、それが進んで行かない。それは限りなく遠い将来まで無期限に延期されるようなことです。それでは希望が持てません。救いが見えません。神を信じる民はいつまでこの状態に置かれるのか。悪はこれからもさばかれずにのさばるのか。約束された栄光の救いの日は結局来ないのか。そのためヨハネは半ば絶望して激しく泣いたのでし

よう。

この彼の姿は、ある意味でこのヨハネの黙示録を知る前の私たちにも当てはまると思います。私たちもこの世にあつて様々な苦難を経験します。信仰を持っても良いことばかりではありません。むしろ苦しいこと、理不尽に思うことが沢山あります。主よ、どうしてなのでしょう。いつまでこうなのでしょう・・・。神の御心が分からず、良い将来があるのかどうかも分からない。

しかしそんな私たちに希望を与える展開が記されます。5 節で長老の一人が「泣いてはいけません。ご覧なさい。」と言い、「その巻物を開き、七つの封印を解くことができる」方がいると言います。その方についてまず「ユダ族から出た獅子」とあります。これは誰のことでしょう。これは創世記 49 章にある族長ヤコブの言葉をもとにしたものです。ヤコブは自分の子どもたち一人一人に祝福の言葉を遺言のようにして残す際、ユダに対して、49 章 9～10 節でこう語りました。「ユダは獅子の子。わが子よ、おまえは獲物によって成長する。雄獅子のように、雌獅子のように、うずくまり、身を伏せる。だれがこれを起こせるだろうか。王権はユダを離れず、王笏はその足の間を離れない。ついには彼がシロに来て、諸国の民は彼に従う。」これはユダ族から将来、まことの王・救い主が現れることを預言するものでした。つまりこの「ユダ族から出た獅子」とは、この預言に従ってユダ族から出たイエス・キリストを指します。獅子は何と言っても強い動物です。百獣の王、無敵のような存在です。そのように圧倒的な力で敵に勝利する救い主の姿が表現されています。またその方は「ダビデの根」とも言われています。これはイザヤ書 11 章 1 節の「エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ」という言葉をもとにしたものと思われます。イエス様はダビデ王が指し示すまことの王として「ダビデの子」と人々から呼ばれましたが、それだけではイエス様がダビデより劣った存在になってしまいます。イエス様はご自身がダビデの子と呼ばれることは正当であることを認めつつ、同時にダビデが私の主と呼んでいることを取り上げて、「ダビデ自身がキリストを主と呼んでいるのに、どうしてキリストがダビデの子なのでしょう」と問われたことがありました。つまりイエス様は「ダビデの子」という単なる人間的視点からだけでは捉えられない方であるということでした。ダビデに勝る「ダビデの根」に当たる方、すなわち神的存在、神そのものなる方であることを考えずには理解できない方であることを示そうとされました。

このような「ユダ族から出た獅子」また「ダビデの根」が勝利したので、「彼がその巻物を開き、七つの封印を解くことができます」と長老の一人は言います。「勝利した」と過去形で言われていますように、もはや勝負は決定的につきました。そういう方として、その方は神の巻物の封印を解き、そこに記されている神の御心を実現させて行くことができます。

そう言われてヨハネが見たものは何だったのでしょうか。彼は長老のことばを聞いて、きっと力強く、雄々しい偉大な戦士のような存在が現れると期待して目を上げたのではなかったのでしょうか。ところが彼が御座の近くに見たのは何と子羊でした！ライオンのイメージとあまりにかけ離れています。反対に弱さで特徴づけられるような動物です。しかもその子羊は「屠られた姿で」でした。何というパラドックスがここにあることでしょうか。ここに聖書の独特なメッセージがあります。

この子羊はもちろんイエス・キリストのことです。バプテスマのヨハネはイエス様を見て「見よ、世の罪を取り除く神の子羊」と言いました。その言葉は旧約聖書のイメージに基づきます。すぐに思い起こされるのは過越の子羊です。エジプトを出る際、イスラエルの家では子羊が屠られ、その血がそれぞれの家の二本の門柱と鴨居に塗られ、その家はさばきが過越しました。これは子羊の犠牲を通してイスラエルは救い出されるという真理を指し示すものでした。またイザヤ書 53 章 7 節の次の御言葉も思い起こされます。「彼は痛めつけられ、苦しんだ。だが、口を開かない。屠り場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、云々」と。キリストはこれらが指し示すまことの子羊として、私たちの罪をその身に背負い、私たちに代わって屠られ、それによって私たちが救われるようにして下さいました。そしてヨハネがここで見たのは屠られ、死んで、そこに横たわり、息をしていない子羊ではありません。贖いのわざを成し遂げて立っている子羊、すなわち復活し、今も生きている姿を彼は見た。私たちはここからイエス様は復活し、栄光に入られた後も、十字架の傷跡を持っていることを教えられます。この世の考えで行けば十字架の傷跡は恥ずべきもので、早くに癒やされ、その傷跡がなくなる方が良いと思われるかもしれませんが、聖書の考えではそうではないのです。この「屠られた」という言葉も原文では完了形で記されていて、今なおその状態が継続していることを示します。つまりキリストが私たちの身代わりとして屠られたそ

の犠牲こそ私たちを救う力の源であるということです。この十字架のみわざのゆえに、この子羊は「獅子」にたとえられるほどの力を持つのです。その方の強さは 6 節後半で 7 つの角と 7 つの目で表されています。角は旧約聖書で強さの象徴として使われて来ました。「あなたは野牛の角のように私の角を高く上げ、私にみずみずしい油を注がれました」（詩篇 92 篇 10 節）。一方の「7 つの目」は 7 という完全数と相まって、この方がすべてをご存知であることを指しているのかもしれませんが。その 7 つの目については「全地に遣わされた神の 7 つの御霊であった」とも言われています。これはキリストが聖霊を全世界に遣わしてすべてを見ておられるとともに、その聖霊によってご自身の支配を豊かに発揮されることを示しているのかもしれませんが。

そしてヨハネが見たその子羊はどうしたのでしょうか。最後の 7 節に「子羊は来て、御座に着いておられる方の右の手から巻物を受け取った」とあります。この方こそ神の巻物を受け取り、その封印を解き、そこに記されている御心を人々に知らせ、またそれを実行される方です。この方を通して神がこの世界に対して持たれた最終的御心は展開されて行きます。この後の世界のすべての歴史の成り行きは、この方の手に委ねられたと言うこともできます。私たちの救い主が世界と宇宙の全権を持つ立場に就いたことは、この方に信頼するすべての者にとっての大いなる望みであり、喜びです。ですからこの方が巻物を受け取った時、あらゆる賛美が炸裂したことが次の 8 節以降で記されます。その場面は来週見たいと思います。

以上の箇所から改めて私たちの救いはただイエス・キリストにこそあることを覚えさせられます。神はなおこの世界を支配し、導いていると 4 章で知らされても、その神の前で果たして私は救われるのか、聖なる神は罪人である私を祝福できるのか、定かではなかった私たち。しかし今日の箇所を通して、この世界には私たちのために屠られた方がいることを覚えさせられます。旧約から指し示されて来た私たちの罪を取り除くまことの神の子羊。その方が私たちのために無限に尊く、きよいのちを注ぎ出してくださいました。この方と結ばれることによって私たちの罪は赦していただけます。どんなにその罪が深くても、この方の犠牲によって赦されない罪などありません。私たちは神が備えてくださったこのまことの子羊のもとへ行き、罪の赦しを受けて、聖なる神の前に立つことができる者、この神に受け入れられる者、そしてその祝福に生かされる者へ導かれたいと思います。

そしてもう一つ今日の箇所から覚えさせられることは、この子羊が今や世界と宇宙を治める立場に導かれたということです。この子羊によって私たちの罪が赦されるばかりか、その方が御座に着いている方から巻物を受け取り、これからの全歴史を導く主権を与えられたことは、この方により頼む私たちにとってこの上ない慰めです。なぜならこの後の歴史を最後まで導いてくださるのは、私たちを愛し、いのちまでささげてくださった私たちの救い主だからです。なお最後のゴールにたどり着くまでには様々な戦いがあるでしょう。しかしこの世界はたとえ無秩序のように見えても、御子が治めています。御子のご自身の十字架の犠牲を通して勝ち取った奇しい贖いの力によって、より頼む者たちをしっかりと守り、導いて下さいます。またご自身、人々の目に敗北と見える十字架からこの勝利を勝ち取られたように、同じく一見敗北と世の人々の目には映る私たちの様々な出来事や経験から、どんな勝利と祝福を取り出されるか分かりません。この方はこれから封印を一つ一つ解いて、そこに記されている神の御心を私たちに示し、またその御心を展開させて下さいます。そのことばに聞いて、神がこの世界に対して持つておられる御心について教えられて行きたいと思います。そしてどんな中でも、屠られた姿で立つ子羊がすべての上にあって支配してくださっていることに慰められて、その方の御声に聞き従い、その方によってついに素晴らしい救いに到達させていただける神の民の幸いに歩いてまいりたいと思います。